

はらから

イスラエルとパレスティナが停戦合意して、少しほっとしました。それにしても、どうして躊躇なく人命を奪うことができるとのか理解ができません。兵器が自動化され「現実の死」が見えなくなっていることもあるかもしれません。

しかし、政治指導者の意志によつて戦争が左右されている現状をみると、指導者に他者の痛みへの共感を促す良心や宗教が枯渇しているのではないかと思つてしまいます。

それで思い出すのは憤怒の形相をした不動明王です。仏法に従わない者を恐ろしい姿で脅し教え諭します。それでもしないと仏法に従わないからです。不動明王が現れてネタニヤフやプーチンらを制止してもらえないかと思う今日この頃です。

〒五二〇〇四三
大津市中央一丁目二二二
電話 〇七七一五二二一七六四六
住職携帯 〇九〇七七八七七一六四七
Eメール eijunji1608@gmail.com

ホームページ


春季彼岸会法要 OHIGANのつどい

日時 三月二十三日(日)

十時 勤行

十時半 御法話

十二時 お弁当、解散

講師 三上明祥氏

本福寺(堅田)住職

本願寺派布教使

講題

『無常の風きたりぬればく別れの悲しみを照らす光』

服装

平服で結構です

*お弁当をご用意します。数把握する関係上、ご参拝下さる方はお寺へ三月十日までにご連絡下さい。

Eメール: eijunji1608@gmail.com

ライン: 永順寺 公式アカウント

*通常は送信専用ですが出席連絡はご使用可にします。

連絡はご使用可にします。

住職携帯 (090-7887-1647) への

ショートメールでも結構です。

その際必ず名前をお書き下さい。

帰敬式のご案内

ききょうしき
帰敬式というのは、「釋〇〇」という法名を本山で頂く儀式のことです。現在、すでに30人以上の方が受式されています。一般的には「戒名」と呼ばれますが、浄土真宗では「法名」といいます。「法」は「仏教の教え」という意味です。



サザンカ

ります。死は必ず来るし、いつ来るかは不定です。だから、法名付けて覚悟を決める。生前に自分の法名を知る事ができるし、安心して生きられるし死ねる。南無阿弥陀仏と念仏する機会が増える…。生き方が少しずつ変わると思っています。

今年の予定は、次の通りです。詳細は申込みされた方に別途お知らせします。

日時	六月四日(水)
集合	十二時半 西本願寺
冥加金	一万円
日程	一時半 帰敬式
	二時 国宝鴻の間
	など見学
	三時 解散
申込み	三月十日(月)まで。
	電話でお願いします。
その他	①頂いた法名の変更はできません。
	②住職が法名をお付けする場合は、冥加金は、本山二万円、住職五千円必要となります。

暮らしの中の 浄土真宗

このコーナーでは、仏教・浄土真宗の教え・見方を日常の暮らしに即してご紹介できればと思っています。

今回は「縁起」について。

「縁起」というのは、何かの出来事（これが「果」です）が起こった時、そこには必ず原因（「因」と「縁」）があるというものの見方です。「因」は根本原因、「縁」は間接的な原因です。



たとえば、花が咲いた時、花の種が「因」で、水や太陽の光などが「縁」です。種（因）だけでは花（果）は咲きませんが、種がなければ、どれほど条件が整っていても（縁）

フォトでほっと

実は、住職の趣味は写真なんです。まあ、下手の横好きですが、どこに行くのも大抵カメラ持参です。それで、こういうコーナーを設けてみました。私の写真も載せますが、皆さんからも投稿して頂けるとうれしいです。一言コメントもよろしくお願ひします。



三羽の雄のヒドリガモがすいすい。びわ湖ホール近くの水辺で撮りました。

花は咲きません。

その条件（縁）も、太陽や水といった花が咲くのを後押しする縁だけではなく、開花を邪魔する条件、たとえば、種が踏み潰されなかったという条件も必要です。前者を「与力の縁」、後者を「不障の縁」といいます。私のことを例に、この二つの「縁」についてお話します。

私の曾祖父は七番目の男子として生まれ成長して住職になりました。その条件（縁）も、太陽や水といった花が咲くのを後押しする縁だけではなく、開花を邪魔する条件、たとえば、種が踏み潰されなかったという条件も必要です。前者を「与力の縁」、後者を「不障の縁」といいます。私のことを例に、この二つの「縁」についてお話します。



第十三代住職教盈（きょうえい）

私の曾祖父は七番目の男子として生まれ成長して住職になりました。「因」はさておき、しばらく

して気が付いたのは、六人の兄弟の一人でも成長して住職になっていたなら、私は生まれていなかったことです。つまり、六人が亡くなっただけで私が生まれる「不障の縁」になっただけのことです。これはショックでした。六人の子ども（全員十歳未満）を次々と亡くした親の悲しみはいかばかりであったか。私のいのちには、喪失の悲しみと七番目の子の成長の喜びはもとよりですが、さかのぼれば、無数の人々の喜怒哀楽が幾層にも沈殿しているのだと、思いました。生きるとは、そういういのちを生きていくことなのだと思います。



これは誰のいのちについてもいえることです。「先祖」ということの本当の意味は、こういうことなのではないでしょうか。

永順寺 YouTube チャンネル 親鸞聖人の生涯 (第1回~第4回) 《ホームページからも入れます》

昨年から月例「南無の会」で『正信偈講座』を始めました。それに先立ち「親鸞聖人の生涯」についてお話をしています。現在、聖人29歳から35歳の頃、法然聖人の吉水草庵での出来事についてお話しています。YouTubeでもご覧頂けます。
テキストは動画画面で拡大すれば読めますが、『はらから』とHPの『ブツぶつブログ』にも掲載します。ただ、『はらから』は回数・分量の関係で遅れての掲載になります。ご了承下さい。

《南無の会》 ◇親鸞聖人の生涯⑤

三月九日(日) 二時~四時

《その他の行事》 ◇真宗のつどい

二月二十二日(土) 一時~四時

場所: 野洲文化ホール

内容: 親鸞聖人ご誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要

記念講演

講師: 釈徹宗氏(相愛大学長)
講題: 「親鸞聖人の生涯に学ぶ」

◎自由参加です。無料です。

親鸞聖人の生涯 ③

「親鸞聖人の生涯」と銘打ちながら、なかなか親鸞聖人が登場しません。今しばらくお待ち下さい。いわば「前史」を少し詳しくお話した方が、親鸞聖人の革新性を一層理解しやすいと思っております。革新性といいますが、本来の仏教に近づけたといった方がよいかもかもしれません。それは鎌倉時代に活動された他の祖師方にもいえるかもしれませんが、ここでは聖人に限定してお話することになります。
さて、前回は、仏教の伝来から奈良時代の国家仏教の成立までお話をしました。当時の仏教は、宗教という側面と先進文化の両面を持っていました。宗教面においては、個の心の救済が目的ではなく、豪族・貴族・天皇家のための除災招福、病氣平癒や延命、つまり、*現世利益の祈願を担ったのでした。

*現世利益: 生きていく今、仏・菩薩から受ける利益のこと。息災延命、除災招福、病氣治癒などをさす。
浄土真宗ではこれらを祈願することはない。

そうした中、厩戸皇子(聖徳太子)は、仏教の教理を理解した数少ない人物でした。

奈良時代になると、天皇制国家の安寧を祈る国家レベルの

現世利益の実現が期待されました。これを鎮護国家思想といいます。そのために聖武天皇は「国分寺創建の詔」を発し、全国に国分寺・国分尼寺を建立しようとしたのでした。このことは前回お話しましたがもう少し復習をしておきましょう。

国分寺の塔には『金光明最勝王經』が安置され僧尼に読誦(読み唱えること)するところが求められました。このお経は四天王らの諸天善神が国を護つてくれるという護国の思想を説く經典だったからです。国分寺の正式名称「金光明四天王

護国之寺」はこれに由来します。

国分尼寺は正式名称を「法華滅罪の寺」といい、『法華經(妙法蓮華經)』を安置しました。『法華經』は、鎮護国家を祈る經典でもあり、また、当時成仏できないとされていた悪人や女人の成仏を明らかにしている經典でもありました。

この「詔」が發布された背景には、朝鮮半島の新羅という国の侵攻の心配や、疫病(天然痘か)が全国的に流行するという危機的狀況がありました。

このようにして国家の安寧と天皇貴族のための現世利益の実現が仏教に期待されたのでした。その集大成が次にお話する東大寺大仏の造営でした。

◇「毘盧遮那仏造営の詔」

「東大寺の大仏」と私たちは呼んでいますが、正式名称は「毘盧遮那仏」といいます。これはインドのサンスクリット語の「ヴァイローチャナ」の音を取って漢字に当てた音写語です。

どことなくわかりますね。漢字の意味とは関係がありません。意味から訳すと(意訳)「大日如来」です。「華嚴経」や密教系の『大日経』『金剛頂経』というお経に説かれている仏さまです。

「ヴァイローチャナ」の元の意味は、「太陽」ですが、太陽そのものを超えて、何にもさえぎられずあらゆるものに届く仏の智慧の光を象徴しています。それだけではなく、大日如来は、過去現在未来を通じて永遠であり、全宇宙そのものだと言われ、さらに、あらゆるいのちの根源であり、山川草木もふくめて一切の衆生はその一部だと説かれます。

聖武天皇は、このような毘盧遮那仏の力で国家の安寧を図ろうとしたのでした。そこには、中国の影響もありました。当時、中国史上唯一の女帝則天武后が独自の王朝をたて、国家の安寧を願って、龍門に毘盧遮那仏を

造営しています。日本からの遣唐使もここを訪れています。

こうして天平十五年(七四三)聖武天皇は紫香樂宮(現在の信樂)で「毘盧遮那大仏造営の詔」を発し甲賀寺(廃寺)で造営を始めました。その詔を紹介します。

……私はこの国を治める者として、三宝(仏・法・僧)の威光とその力を頼りとし、そうすることによって天地ともに安泰となるよう願っています。そのために今、万代までの幸せを願う事業を起こして、草、木、動物など、この世の生きとし生けるもの全てが繁栄することを心より望んでいます。……そしてこの事業が成功したならば、私も国中の人々も、ともに同じく仏の功德を受け、ともに仏の悟りの境地へと至ることができるでしょう。……

現代語訳は「九條正博一歴史学」
https://note.com/m_9john4s
こうして天皇制国家の安寧を護るための仏教という位置づけ

が完成したのでした。寺院で働く僧尼は朝廷が任命権をもつ「官僧」であり、国家に奉仕するいわば国家公務員でした。

造営の詔が発布された二年後、都は紫香樂宮から再び平城京に遷りました。それに伴い大仏の造営も奈良の金鐘寺(東大寺の前身)に移り、七四九年に開眼会が行われたのでした。

◇南都六宗と「学問仏教」◇

奈良仏教にはもう一つの特徴がありました。それは、「学問仏教」という側面です。インド・中国で經典の研究がおこなわれ、優れた書物が著されました。これを「論」といい、その「論」についての研究も行われました。これを「釈」といい、あわせて「論釈」といいます。それらが日本にも輸入され、グループに分かれて研究されていました。そのグループが「宗」(衆)と呼ばれました。主な宗が六つあります。「南都」とは、奈良の都を指します。

六宗とは三論宗、法相宗、華嚴宗、俱舍宗、成実宗、律宗の六宗です。

すべての研究グループがそろっていたのは東大寺でした。元興寺、法隆寺、大安寺、興福寺などでもそれぞれ複数の研究グループがあり、僧侶はそこで仏教を学んだのでした。

以上述べてきたことをまとめると、当時の仏教は、豪族や天皇の現世利益の実現と国家の安寧を祈願する一方で、仏教教理の研究という学問仏教の両面性をもっていました。しかし、庶民は、救済の対象から外れていました。

ただ、例外的ですが、「僧尼令」に反して民衆を教化したばかりか、橋をかけ、灌漑治水などの社会救済事業も行った行基という僧がいたことは記憶にとどめておきたいと思えます。

次号は、平安時代の仏教のお話です。最澄の天台宗と空海の密教を中心にお話をします。